

## 文化九年佐伯藩百姓一揆

江戸時代に尾浦おうらから一昼夜かかる西方の山里に、仁田原村にたはらむらなど七つの村が在りました。

山里の農民は、重税や役人の悪行によつて、苦しい生活を送っていました。農民達は、幾度も役人の不正を訴えましたが、見直されることはありませんでした。

彼らは、家族や村の暮らしを守るために、やむをえず佐伯藩への強訴におよびました。

これが佐伯藩最大と云われる百姓一揆です。

### 一八一二年 文化九年

#### 一月十一日

一揆は因尾村いんびむらと中野村なかのむらから起こりました。

それは、百姓達による命がけの直訴でした。

頭立かしらたつ者は、仁田原村の正定寺にあつまり、「願望状がんぼうじょう十ヶ条」を書きしたためました。

#### 一月十二日

五千の百姓が正定寺裏山にそびえる、於利宇峠おりおとうげに集まり、明け六つの大鐘を合ごに怒濤どとうの如く城下へ殺到したそうです。

郡代や代官と大勢の兵が一揆の制圧にあたりましたが、百姓は一步も引かなかつたと聞きます。

家老の戸倉織部とくらおりべは、すぐに大事を知り、自ら百姓の説得に出向きました。

求めに応じた百姓達は、願望状と罪過の処分を家老にゆだねて、平然堂々と村々へ立ち帰つたと云います。

### 義民の処分と誇り

一揆の処分の中に、

深島ふかしまに遠島された友人ともはち、

蒲江浦かまえうらに所替えされた富蔵とみぞう、

入津浦にゅうづうらに所替えされた善吉ぜんきちがいました。

彼らが、至情しじやうをささげ正義に身を投じた、正定寺ゆかりの檀徒だんとです。

時の悪政を正し、多くの民を救つた義民の誇りは、

子孫に脈々と受け継がれ、陸から海へと彼らの生活が変わっても、

歴史のいしずえである菩提寺を変えることはありませんでした。

## 一揆の民と謎

一揆が起こる五十年ほど前に、

仁田原村と赤木村出身の一族が、

深島や屋形島やかたじまを経て、尾浦に住んでいました。

先住の民と一揆の民は、格別のはからいで、

正定寺への往來おうらいが許されていきました。

一揆の伝説では、

百姓の信望を受けて彼らを支える、謎の山伏やまぶしが登場します。

その山伏が、色利浦いろりうらで産まれた正定寺第十六世の珍ちんじゅう 宗和尚ではないかと、

伝えられています。

珍宗和尚は「御綸旨ごりんじ」を賜たまわるほどの高僧でした。

「仁田原の正定寺にいてみたら、くわいだごじやというたわいな」と言う  
謎めいた里唄もあります。

尾浦では「和尚さん」を「もしさん（もっさん）」と呼び、彼らの子孫が植えた  
とされる『ツワブキ』が、今でも正定寺に群生しています。

平成二十四年（二〇一二）

一揆 義挙 二百年

記念

正定寺第二十四世晋山しんざんしき式